

大川平三郎二十歳の

建白書

高島菊次郎先生祝辞（於生誕百年祭）

大川平三郎先生年譜並に関連事項

大川平三郎翁事業関係年譜

明治十二年大川翁が二十歳の時に書かれた建白書であります。

明治八年三月、王子製紙に絵図引として採用され、ついで職工となり、創立当時の抄紙会社で僅か四年の実地の経験を積んだ青年が書いたもので、巧妙精緻、理路整然、会社の運命を双肩に担はんとする気魄のこもった雄渾な文章であります。翁の人柄の全貌を知る上に役立つ最良のもの信じ、ここにご紹介する次第であります。

建白書

製紙會社ハ創業以來既ニ五閏年ニ垂ントス。退イテ既往ノ景況ヲ顧ルニ百般ノ艱難ヨリ來レルノ慘狀ハ實ニ之ヲ今日ニ云フニ忍ビザルモノ有リト雖モ、幸ニ社員諸君ガ誠實ニシテソノ任ニ熱心ナルニ依テ、工事ノ進歩ハ殊ニ迅速ナルヲ得、今ヤ其ノ營業全體ハ素ヨリ意ニ満足スベキニアラズト雖モ、又故サラニ痛慮ヲ要スベキニアラザルノ場合ニ進メリ。然レドモ、是ノ如キハ唯々ニ損ヲ蒙ラザルニ安ンズル者ニシテ、決シテ製紙會社ガ其銳意ヲ怠ルベキノ場合ニアラズ。製紙會社ハ宜シク正理ニ応ジテ満足スベキノ利益ヲ得ン事ヲ忘ルベカラズ。

正理に應じて満足すべき利益の保證

正理ニ應ジテ満足スベキノ利益トハ何ゾヤ、其資本ヲ以テ世間平均ノ利益ヲ得ルヲ云ウ。而シテ茲ニ世間平均ノ利益ト云フモ、世間ノ事業ハ極メテ多難錯雜ナルモノタルガ、故ニ、其利益ノ平均ハ素ヨリ甚ダ知ルニ艱難ニシテ、工業最モ然リトス。

看ヨ同一ノ資本ヲ用ユルモ、其使用者ノ智愚ト、其事業ノ幸不幸トニ因ツテ、其得ル所ノ利益モ亦甚異ナルニアラズヤ、故ニ有名ナル經濟學者スミス氏ハ、世間普通ノ利息相場ヲ以テ資本ノ平均ノ利益ト定メタリ。此ノ事ノ當否ニ於テハ、吾輩今其如何ヲ知ラズト雖モ、假リニ其見ヲ以テ至當ナリトスルモ、現今製紙會社ガ得ルノ利益ハ未ダ決シテ充分ノ點ニ達シタリト云フベカラズ。

今ヤ世間ノ利息相場ハ查シテ其何程ナルカヲ知ラズト雖モ、大概一割二三分ヲ以テ當トスルガ如シ。此ハ是レ貨幣ノ取引ニシテ、然ル事ナレバ製紙會社ノ如ク全く其資本ヲ擲ツテ機械ヲ購フニ當ツテハ、又其業ノ危険ニ向テ幾分カ餘量ノ利益ヲ要求セザル可ラズ。假ニ之ヲ資本ノ八割分ト見做サバ製紙會社ガ正理トシテ満足スベキノ利益ハ其資本ノ二割即金六萬圓ナリトス。(資本ヲ三拾萬圓ト算ス)

利益僅少の原因は技術の未熟練

此ノ如ク論ジ來ツテ、能ク製紙會社現時ノ景況ヲ見レバ、其利益ハ未ダ資本ノ一割ダニモ達スルヲ得ズ。實ニ嘆息ノ他ナキヲ奈如セシヤ。而シテ仔細ニ其利益ノ多カラザル原因ヲ探索スレバ、主トシテ其熟練ニ達セザルニ據ラザルハナシ。熟練増加スレバ品位ハ進ミ、製出ハ増ス。實ニ熟練ハ工業家ガ利益ノ元素ト云フモ可ナリ。然リ而シテ此ノ如ク熟練ハ會社ニ於テ甚シキ關係アルガ故ニ、能ク其既往ノ景況ト現時ノ事情トヲ考察シ、創業以來進歩ノ速力ヲ以テ比シ來ルトキハ、現時ノ速力ハ更ニ甚ダ遅々タルヲ見ル。蓋シ當初ニアリテハ其業ノ段階甚ダ卑キヨリ其進歩モ殊ニ平易ナル事ヲ得タルモ、今ヤ然ラズ。漸クニシテ既ニ簡單ノ科業ヲ踏ミ來リ更ニ艱難ノ蘊奧ヲ求メントスルノ場合ナレバ、其進歩ノ遅々ナル敢テ怪シムニ足ラズ。然ト雖モ、如何セン吾輩ハ實ニ目的トシテ進行スベキノ標準アル事ナク、恰モ暗夜ヲ行クニ燈ナキガ如キノ狀ニシテ、殆ンド爲スベキノ術ニ盡キタリト云フベシ。是ニ於テカ銳意其策ヲ研究スルモ唯其蘊奧ヲ海外ニ求ムルニ他ナキヲ知ル。依テ今左ニ彼ニ就キテ問フベキノ事項ト其ノ理由トヲ列記スト雖モ、唯其概略ニシテ一モ據ルベキ所ナク、僅ニ全貌ノ一斑ト云フベキ而已。

破布の性質に關する研究

破布ハ製紙上最モ緊用ナル者ニシテ、其性質ニ於テハ頗ル研究ヲ要スベキアリ。其大略ヲ論ズルニ同一ノ木綿ナルモ、其產地ニ因テ性質ニ異ナル所アルヨリシテ、甚シキ差異ヲ製紙上ニ生ズル事アルガ如シ。外國ノ製紙ヲ見ルニ其質滑澤緻密ニシテ且光輝アリ、之ヲ水ニ投ズルモ、乾燥ノ後日本洋紙ノ如ク、甚シク其様ヲ變ズル事ナク、之ヲ火ニ燃スニ其殘燼亦大ニ日本洋紙ニ異ナル所アリ。此段ノ事項ハ一ニ含有スル混和物ノ成跡ナルベシト信ズルト雖モ、又少シク破布ノ性質ニ關スルヤノ疑ナキニアラズ。是事ニ附キテハ是迄隨分注意ヲ加ヘタレドモ、未ダ必然ノ理由ヲ確知スルコト能ワズ。若シ一旦其理由ト醫方トヲ確知セバ大ナル改良ヲ和製洋紙ニ起スベシ。

其他破布ノ製法ニ關シテハ、藥品ノ用量、汽壓ノ量、煮ルベキ時間等ニ於ル如ク、皆齊シク緊用ニシテ研究ヲ用スベキ事多シト雖モ、其細密ノ事實ヲ詳記スルニ於テハ、徒ラニ文章ノ冗長ニ涉ラン事ヲ恐レ、余ハ唯緊切ノ事項ヲ摘シテ之ヲ記セント企テタルナリ。

麻布使用に關する研究

元來製紙ハ多ク麻ヲ用ユルニ隨ツテ、抄造モ益便利ニシテ品

位モ愈々精良トナルハ疑ナキモ、現時日本ノ景況ニテハ麻布ハ供給僅少ニシテ、實ニ百分ノ五以上ヲ用ユル事ハ到底爲シ能ハザル事ナリ。故ニ今外國ニテハ果シテ幾何ノ麻ヲ用ヒザルヲ得ザルカヲ探聞シテ、若シ多量ヲ用ヒザレバ到底抄造ニ難儀ナリトノコトヲ確知セバ、麻ニ代用スベキ料ヲ見出ス事ヲ研究セザル可ラズ。現今外國ニテハ抄造ヲ便利ニスルノ目的ニ向ツテハ、一ニ麻ノミヲ用ユルカ、或ハ既ニ麻ニ代用スベキモノヲ用ユルカ是又切ニ探知セン事ヲ要スルナリ。

破布代用纖維の研究

破布市場ノ景況ハ、今如何ノ場合ニ及ビタルヤ、各製紙書及新紙等ニ就キテハ考察スルニ、其供給ハ常ニ需要ニ及バザルニ苦シムヨリ製紙場ニ於テモ競ツテ破布ニ代用スベキノ纖維ヲ得ルニ汲々タルハ、最下等ノ紙ニテハ木材ヨリ製シタル纖維ヲ混用シタル物多キニテ知ルベシ。而シテ其場合ノ茲ニ至レル以上ハ破布市場ノ有様ガ極メテ微忽ノ點ニ行届キ居ルハ決シテ疑ヲ容ル可ラズ。日本ニテハ現時破布ノ供給充分ナレバ敢テ是ヲ憂ウルニ足ラザルガ如シト雖モ年月ヲ經ルニ從ヒ自然供給ニ向ツテ眉ヲ顰ムルニ至ルベキハ實ニ明々タルモノアリ。然ラバ則チ外國ニテ今日ノ場合ニ進ミタル經營ト、現時取引ノ方法トヲ探知シテ之ヲ營業ノ模型トナスコトハ非常ノ利益ニアラズシテ何

ゾヤ。

製紙原料としての藁

此ノ如ク果シテ破布ノ供給ニ向テ痛慮ヲ要スベシトセバ、又一ニ破布ニ代用スベキ纖維製法ヲ學バザル可ラズ。

今ヤ外國ニテ製紙元質ノ破布ニ次グモノハ藁ナリトス。幸ニシテ日本モ又藁ノ供給ニ乏シカラザレバ破布ノ代用品ニシテ先第一ニ望ヲ屬スベキモノハ蓋シ藁ナリ。之ヲ紙ニ製シテ破布ヨリ低價ナルコトヲ得バ破布ノ拂底ニ至ルヲ待タズシテ之ヲ今日ニ用ユルモ利ナリ。況ンヤ藁ハ價格ノ如何ニ係ハラズ、自然其硅素ヲ含保スルヨリ著シク製紙ノ質ヲ滑澤緻密ト爲スベキノ望アルニ於テオヤ。

破布買入手續と運搬

破布ハ元來其價甚ダ高カラズ、而シテ其容積甚大ナルガ爲ニ頗ル運搬ニ不便ナルヨリ沿海ノ地ニアラザルヨリ之ヲ遠地ニ求ムル事難シ、是實ニ吾輩ノ憾トナス所ナリ。

然レドモ外國ノ如ク供給ノ不足ニ至リタル場合ニテハ其運搬ノ法ニ於テモ亦必ラズ盡シタル所アリテ遠地ノ破布ト雖モ敢テ之ヲ棄テザルハ論ヲ俟タズ、然ラバ其運輸及荷造ノ方法等ハ必ラズ見テ以テ益スベキアルヲ信ズ。破布買入ノ手續ハ如何ナル

方法ヲ以テ之ヲ至便利ナリトスルカ是又探聞ヲ遂ゲザル可ラズ。

機械の調和は製造の眼目

機械ノ調和ハ製造ノ大眼目ニシテ苟モ其調和ニ於テ缺クル所アレバ精良ノ紙品出ス事能ハズ。機械固有ノ製法ヲ爲ス事能ハズ。而シテ其機械ノ調和宜シキヲ得ル事ハ單ニ人々ノ熟練ニアリテ唯久シキ習慣ノ成課ナレバ口以テ云フ可ラズ、筆以テ書ス可ラズ、是故ニ余ハ今茲ニ於テ唯一言スルヲ得ルノ他ナシ。曰ク機械ノ調和ハ製造ノ眼目ナリ。調和整ハザレバ精良ノ紙品ヲ出スコトナク、機械固有ノ製出ヲ爲ス事能ハズト、此ノ如キガ故ニ機械ノ調和ヲ得ルヲ學ブ事ハ切ニ緊要ナル事ニシテ余ガ銳意シテ其蘊奧ヲ得ンコトヲ望ム所ナリ。製出ノ増加ハ工場ガ富營ノ進歩ナリト云フベク、製出ノ分量ハ工場ガ幸不幸ノ分量ヲ表スルト云フモ可ナリ。余ハ常ニ外國ノ製紙所ノ製出高トノ割合ヲ比較シ來ル毎ニ未ダ會テ嘆ゼズンバアラス、同一ノ機械ヲ以テ彼ハ果シテ何故ニ夥多ノ製出ヲ爲シ得ルカ何故ニ製紙會社ハ充分ノ製出ヲ爲シ能ハザルカハ專ラ同一ノ種類ヲ製造スルト各種ノ製造ヲ爲サザルヲ得ザルノ利害ニ在ル可シト雖ドモ又他二百般ノ事項アルナカラシヤ。若シ能ク審カニ彼我ノ事情ニ通ジ得テ其得失ヲ辯ジ短ヲ棄テ長ヲ採リ孜孜怠ル事ナキ時ハ彼ト同一ノ製出ヲ爲スニ至ルベキハ理ノ最モ見易キ者ナリ。

其他機械ノ調査ニ係リテハ汽力ノ儉約法元質ヲ儉約スルノ術又或ハ抄紙具ノ使用法等一モ緊切ニシテ研究ヲ要セザルモノナシト雖モ事多端ニシテ一々之ヲ託スルニ暇アラザルヲ憾ム。

製出増加と品位改良

製出ノ量ヲ増加スルノ法ト品位ヲ改良スルノ法トハ共ニ工業ノ基礎ニシテ實ニ第一ニ研究ヲ要スベキ事ナリトス。製紙會社ハ此法ニ於テハ兩ナガラ未ダ完全ヲ得ル事能ハズ。就中製出高ノ増加ハ追日進歩ノ勢アリテ其速力ハ之ヲ前日ニ比スレバ極メテ迅速ナルヲ覺ユレバ到底左マデニ痛慮ヲ要セズシテ外國ト同一ノ場合ニ進ムベキヲ信ズルナリ。然レドモ同一ノ費用ヲ以テ同一ノ製出ヲ爲スニ非ザレバ共ニ力ヲ較フルニ足ラザルガ故ニ彼ハ如何ナル經濟ニ依ツテ幾何ノ費用ヲ要シ以テ幾何ノ製出ヲ爲スカヲ研究セザル可ラズ。畜是ノミナラバ自今製紙會社ガ製出スルノ量ハマダ機械固有ノ量ニ達セザル事遠ケレバ今ニシテ外國ガ實行スルノ道ヲ探知シ得テ以テ一日モ早く同一ノ費用ヲ以テ同一ノ製出ヲ爲スコトヲ企望セザル可ケンヤ、品位ノ一事ニ在ツテハ是迄社員諸君ガ頭腦ヲ煩シタル幾何ナルヲ知ラス其試驗ノ爲ニ會社ガ費シタル金額モ實ニ少詳ノ事ニアラザルベシ。此成果ニシテ品位ノ改良ニ趣キタルハ亦甚ダ尠カラズト雖ドモ未ダ會テ著シキ成果ヲ顯ハシタル事ナシ。

日本紙固有の害

日本ノ製紙ハ其質軟柔ニシテ密ナラズ聊カ光澤ヲ帶ルモ僅ニ水分ヲ受ル時ハ其光澤ヲ失イテ表面忽チ粗造トナル。之ヲ印刷スルニ細末ノ纖維板面ニ粘附シテ容易ニ活字ヲ填塞スルノ害アリ、加之黒汁ノ透過ヲ許シテ酷シク印刷物ノ體裁ヲ汚ス、此般ノ害ハ更ニ洋紙ニ見ル事ナク日本紙固有ノ害アリトス。而シテ日本紙ト外國紙トガ此處迄其性質ヲ異ニスルハ理由果シテ何レノ點ニアリヤ或ハ破布ノ性質ヲ異ニスルト云イ或ハ混合物ノ効ナリト論ズ。

若シ夫レ是ヲシテ破布ノ性質ナラシメンニハ又如何トモス可ラズ。然ト雖ドモ余ヲ以テ之ヲ見ル時ハ幾分カ破布ノ性質ニ關スルモ多クハ混合物ノ効ナルガ如シ。

新聞社印刷所ヲ論ゼズ、總テ紙ヲ以テ生計ヲ營ム者ハ其紙ヲ外國ニ仰グヨリハ日本ニ求ムルノ廉價ナルト便利ナルトニ依リテ頻リニ日本紙ヲ用ヒント渴望スルモ前述ノ害アルヨリシテ深ク望ヲ失ツテ只管改良ヲ待ツノ狀アリ。

是ノ故ニ社員諸君ガ頭腦ヲ盡クシテ其方法ヲ研究スル、敢テ怠ラズト雖モ未ダ其目的ヲ達スルヲ得ズ、若シ彼我實地ノ景況ヲ目撃シテ審カニ其原因ト醫防法トヲ知り、能ク宿弊ヲ去リ和製洋紙ノ名譽ヲ回復スルニ至ラバ其需用モ又大ニ増加スルハ決

シテ疑ヲ容ル可ラズ。

製紙と藥品

製紙ヲシテ黒汁ノ透過ト濕氣ノ浸入トヲ受ケシメザルハ一ニ藥品ノ効驗ナリ。而シテ其同一ノ藥品ガ異様ノ現像ヲ現ハスコトハ實驗ニ富ミタル化學士ト雖モ頗ル其理ニ苦シムコトハ往々製紙等ニ見ル所ナレバ探聞ノ任ヲ擔ツテ外國ニ行ク人ハ專ラ精神ヲ此點ニ凝ラシ、敬禮ヲ厚ウシテ人ノ教示ヲ受ケルコトヲ勤メ傍ラ化學ノ大意ヲ理解シテ日常藥品ノ試驗ニ從事シ精勵倦マズ以テ其目途ヲ達スルニ孜孜タラザレバ決シテ其目途ヲ誤ラザルヲ保チ難キナリ。

工場に使用すべき人員の多寡

工場ニ使用スベキ人員ハ可成丈僅少ナルヲ望ム。人員多ケレバ畜ニ夥多ノ給料ヲ要スルノミナラズ、併セテ又百般ノ雜費ヲ増シ大ナル不經濟トナルコトナリ。是故ニ工場ノ機構ハ可成丈人員ヲ減ズル様爲サザル可ラズ工事ノ都合ヲ謀ツテ適切ノ方法ヲ設クル時ハ五人ニテ爲スベキヲ四人ニテ辨ジ、十人ニテ爲スベキノ業ヲ七人ニテ辨ジ得ルノ方法ナカラシヤ。外國ニテハ如何ナル約束ヲ以テ職工ヲ使役スルヤ、如何ナル方便ヲ用イテ職工ノ勞働ヲ獎勵スルヤ、又職工ハ其方法ニ向ツテ如何ナル感想

ヲ懷クヤ否ヤヲ探知スルハ又缺ク可ラザル事ナリトス。

給料支拂の方法

同一ノ出金ヲ以テ可成丈多量ノ返報ヲ要スルハ經濟ノ大主義ナリ。而シテ其同一ノ出金ニテ返報ニ大差異アルハ給料ヨリ甚シキ者ハアル可ラズ。給料支拂ノ方法ヲ失スレバ決シテ其應分ノ返報ヲ得ル事能ハザルナリ。而シテ其支拂法ハ孰レガ最利ナルカハ、識者ノ研究ヲ待ツコトニシテ容易ニ此ヲ知り難キナリ。確ト支給ノ金額ヲ定ムレバ職工ノ氣風自ラ儉安ニ流ルルノ弊アリ。製出ノ高ニ依テ給料ヲ支給スレバ工事自カラ粗鄙ニ流ルルノ害アリ。畢竟給料ハ僅ニ職工ノ感想ニ依テ返報ニ差異ヲ生ズルニ過ギザレバ外國ノ製紙所ガ支給ノ方法ト職工ガ労働ノ景況ヲ見テ其長短ヲ取捨シタランニハ大ニ我ニ利ナルノ道ヲ得ル事アラン。

學士ヨング氏の說

學士ヨング氏曰ク財産ノ魔術ハ能ク砂ヲシテ金ニ化セシムト旨アル哉言矣。蓋シ物一度ビ人ノ所有トナル時ハ其擁護琢磨ニ據リテ遂ニ著シク變化ヲ爲スヲ云フナリ。サレバ給料支拂法ノ完全ニシテ其當ヲ見ルガ如クナルヲ望事云フモ唯職工ガ其工場ヲ見ル事己レガ財産ヲ見ルガ如クナルヲ望ムニ過ギズ。聞ク處

ニ據レバ外國ノ製紙所ハ賞與金給法甚タ完全ニシテ其職工ハ競ウテ多量ノ製出ヲ爲サントス。余ハ未ダ其如何ヲ知ラズト雖ドモ實驗ニ富ミタル外國製紙所ガ爲ス處ハ必ズ大ニ據ルベキ所アルベキヲ因信シ一日モ早く其方法ト成果トヲ實驗セン事ヲ望ムナリ。

現今米國等ニテハ製紙需要供給之割合ハ如何ノ景況ヲ市場ニ顯ハスカハ詳カニ之ヲ知ラズト雖モ、製紙新聞等ニ就キテ考察スルニ市場ハ常ニ供給多キニ過ギ製紙家ノ技師ノ進歩シテ製出ノ増加スルニ係ラズ、品位ノ益精良ニ趣クニ係ハラズ、頗ル其賣捌ニ困難スルノ如シ。著シキニ至ツテ製紙家中條約ヲ設ケテ互ニ夜業ヲ廢シテ市場ノ過積ヲ減セント論ゼシ者アルヲ聞ケリ。此ノ如キガ故ニ製紙ノ原價ト賣價ノ差異ハ益僅少ノ場合ニ陥リタルハ疑ウベキニアラズ、而シテ其困難ノ多キニ從ツテ製造ノ經濟ヨリ賣捌ノ方法ニ至ル迄悉ク能ク綿密ノ點ニ達シタルベキハ又疑ヲ容ル可ラズ。

製紙會社ガ現時營業ノ體裁ハ素ヨリ之ヲ幸福ナリト云フベキニアラズト雖ドモ、未ダ必シモ斷ジテ之ヲ不幸ナリト云フベカラザルナリ。製紙會社ガ充分ノ利益ヲ得ルニ由ナキハ需用ノ僅ニ依ルニアラズシテ製出ノ不充分ナルニ據ルナレバ、漸々技術ノ進歩ニ應ジテ其事情ノ安樂ニ達スベキハ論ヲ俟タズ。余ヲ以テ此ヲ云ハシムレバ製紙會社ハ不幸ナリト云ハズシテ寧ロコレ

ヲ幸福ノ位置ニアリト云フベシ。

既ニ斯ノ如ク幸福ニ進ムベキノ位置ナル製紙會社ニシテカノ
艱難ナル米國ノ製紙所ガ研究セル方法ヲ解得シタランニハ其幸
福ハ蓋シ余アルニ至ランハ決シテ疑ヲ置クベキニアラザルヲ信
ズ。

昭和三十四年十月二十四日に行はれた大川翁の生誕百年祭に、高島菊次郎先生が述べられた祝辞。

先生は明治八年五月十七日豊前国に生まれ、明治三十三年七月東京高等商業学校をご卒業、明治四十五年五月に王子製紙に入社、昭和十三年十二月から同十七年十二月まで社長に就任されております。

資性謹厳剛直な方で、藤原銀次郎翁と名コンビを組まれ、王子製紙再建の大任を双肩に担い、大正、昭和と数十年に亘り、一身の名利を離れて、只管王子製紙並びに業界の発展に尽瘁されました。

大川翁とは十五歳の年齢差がありましたが、仕事上は可なり近い距離で大川翁を見ておられた方の大川翁観です。

高島菊次郎先生祝辞

この夏王友クラブで成田君と話の末に、成田君から、大川さん恩顧の方々が現在四百名以上五百名になんなんとしており、その大川さんの会を復活したいと思っっているけれども、多少躊躇しているが何う思ふかと、こういう話がありましたので、私は誠に結構なことではないか、何を躊躇しているかと申して置きました。

敗戦後兎角人権尊重というような名に隠れて、恩を恩とも思わないような世の中になつていられる際に、故人の徳を偲ぶ会を開くということは、誠に結構なことであります。今日社会的に欠けていると思ふことは、感謝の念である。それを表わすのであるから、どうぞおやんなさつたらどうかと、若し私も出て良ければ伺いましょうと、こういう話をして居つたんで御座います。その後私は旅行を思い立っており、実は今日旅行に出発

する積りでありましたところが、二、三日前に桜影会の池田会長と伊藤君が参りまして、この旅行を延ばすか、さもなかったら何か書いたものを出して貰いたいと、こう云うことでありました。咄嗟の間に、どうも華々しく美辞麗句を並べてみたところが、充分自分の意志を発表した訳にもなりません、さりとていろんなものを書いて、書いたもので間違つたことを残しては申訳のないことになります。幸い日を延ばすことが出来ましたので、本日末席を汚すことに致しました次第で御座います。

私は唯今、池田会長が熱烈なる心情を吐露して、故人の遺徳と、故人の人格とを賛美する御言葉を伺いまして、誠に感激しておるので御座います。先き程藤原氏の祝辞にありました通り、大川氏は明治、大正時代に於ける産業界の大立物で大恩人でありますが、殊に此製紙事業については非常な御功績を樹てられ、

今日の繁栄の基礎を作られたもので、もうそれ以上私共製紙業に従事した者からは改めてお話する必要もない位であります。

私はこの日本の洋紙製造事業を、今日からつらつら考えて見ますと、これを第一期、第二期、第三期とこの三つに分けて形勢の推移を見るのも面白いと思います、そう考えておりました。第一期は日本洋紙製造事業の創業の時代であり、第二期は王子製紙が当時の王子の専務鈴木梅四郎氏が敢然として米国から新しい設備を輸入して北海道苫小牧に工場を建てた。これが第二期の始まりで敗戦迄を第二期として、敗戦後華々しく各方面の発展をいたしましたのが第三期と、こういうように私は考えております。

創業時代にはあちこちに色々人物が出ました。古いところは広島島の浅野家、阿波の蜂須賀家等が、外国の文物を見られて、有恒社を興こすとか千寿製紙を興こすと言う様なことがありましたが、結局創業時代を大成して下さったのは大川氏であります。殊に王子製紙は夫れによって発展して参ったのでありますから、私共から申しますと、大川氏は殊に大恩人であります。

大川氏は製紙事業のみならず、各方面に御活躍なされて、殊に浅野総一郎氏の仕事に協力された。これは大川さんが王子の工場で働いておられる時に、浅野氏が石炭の供給をしておったそういう関係から、ずっと懇意になって、何んでも二十代で洋

行なざる時、横浜でお見送りしたのは、浅野氏一人であったとか云うような話を聞いております。又仕事に対する先見の明、決断力、実行力というようなものが、お二人とも似よったところがあって、非常に深いお友達になったのではないかと思はれます。浅野セメントに協力なさり、其後東洋汽船だの浅野鋼管等にも御協力なさったと云うようなことで、又其の後、今日この会場に当てられております埼玉銀行にも参加される等、各方面に力を尽されました。大川さんより先きに逝かれた方を別としますと、私共が記憶している中では、事業の種類は違いますが、凡そ同時代で性格や仕事の範囲その他で根津氏とよく似た処があり匹敵した大立物であったのじゃないかと斯う思います。そういうような大人物であり且つ又た事業は多方面であつたのみならず、非常に複雑な御性格であつたように思われますので、私共日常を余り存じませぬ者が、大川氏を此処で評しますのは適當でないけれども、自分の見聞したことを一応申上げる次第ですが、間違いがあつたら皆さんに直して戴き度いと思ひます。

大川氏は改めて私が申上げませんでも、日本に於ける自助伝中の御一人であると思ひます。渋沢翁のお引立ても無論これは見逃すことは出来んかも知れませんが、兎に角大川氏と若い頃一緒に働らいておりました山際奎助君が、私と同じく苫小牧の

工場で働らいておりました頃、この人が時折り茶話に、大川さんのことを話しておりました。山際君は、今の日銀総裁の叔父さんになります。が、どういう関係からか、洪沢翁に御厄介になつて、洪沢家の玄關番から王子の工場に通うようになったと云うことで御座いました。その当時、大川氏も洪沢家から王子の工場と一緒に通つておられました。まあ今で申しますと、大川氏は別に正式な学問をなさつた風にも見えませんが、先き程非常に哲学的宗教的のお話が池田君からありましたが、露骨に申上げますと、殆んど一職工として、耳からの学問でなく、眼と手の学問で独自の自分を作り上げていったものだと思います。

大川さんが洋行なさつた頃は、アメリカでも末だ機械設備の進んで居ない頃で、グラインダーなど動力など要するものは水車直結でありました。山の中で原料の多い地点で、水力のあるところに水車直結でやつておつたという時代であつたと思いません。大川氏が洋行中実習したところを其儘コピーしたものと思われますが、天龍川の川傍の中部で水車直結の工場をお作りになつて居つたので御座います。新しいことを始めれば、どうも何時でも夫れに従事する者の技術が伴わないので、旨く行かないのです。中部も創立以来少しも儲からんで、結局大川さんが責任を負つて身を引かれた。これを世間では、三井銀行が藤山雷太氏を送つて専務にして、大川氏御兄弟を追い出したと

いう風に申しますけれども、実際は大川氏が責任を負われて出られたものと思ひます。

大川氏は其後御承知の通り九州の坂本工場を御経営なさいました。話が長くなりますが、これはまあ色々古い因縁話ですが、坂本というところはその山奥に材料が豊富で、樺などが多かつたところで、元熊本県人で藤村四郎という方が此の坂本工場を創立せられた。藤村氏は何処か東北の知事をなさつておられた方で、技師長は安場安喜氏という方でこの方は九州鎮台といわれて永い間福岡県知事を務め、後北海道長官となつた安場保和さんの嗣子で今山陽パルプの安場君のお父様です。そこへ藤村氏が知事の際に警察関係をやつておつた人を、——これは相馬君の養父なんです、——引っぱつて来て、今で云えば工場管理に当らせただと思ひます。ところがどうもそういう役人上りの仕事で旨くないかん。それからこの工場の機械は、その後大川氏の四大王として活躍した長谷川太郎吉君が、当時横浜の商館に出入りしておつてその機械購入の取次をしたもののようにしたが、この長谷川君が又仲に立つて、坂本の工場を大川氏御兄弟に譲るやうに世話したので、後に長谷川君が大川さん傘下の有数な方になられたと、こういうやうな因縁であります。それから大川氏が其後、木曾の工場をお作りになりました。中津川と須原ですが。私がつつと前に、三社合併直後でしたか

中津川に参りました時に、古い宿屋がありまして、その主人が古いことを話しておりました。渋沢翁が昔、長野県から木曾へ人力車で出られたことがあったそうですが、それを途に擁して土地の人々が、材料が多いから此処で一つ製紙事業をやつて貰いたいと云う運動をしたそうで、それを大川さんが引受けてあそこに工場を創めたと、こういうことのように其時に伺つております。それから芝川工場、これは四日市の人が作つておつたものが芝川に移転して来たのですが、四日市製紙と称して、是れが矢張り大川傘下の別働隊で大川製紙コンツエルンに入つて居つたのです。其後王子が当時の長官に頼まれて樺太開発のために、大泊に小さなバルブ工場を作りましたが。大川さんも又遠い将来のことをお考えになつて此処に基地を作ることを思ひ立たれ、泊居に工場を建て次に真岡に作り最後に恵須取に作られたのでありますが、そういう風に發展なされて結局樺太工業となつたのであります。ところが大川さんが樺太ばかりに金を掛けるので、長谷川君が九州である自分の方を無視されては困ると憤慨した結果か九州製紙の新工場として同君が主唱の下に八代工場を建て結局樺太工業と合同統一され大樺太工業会社が出現したのであります。

斯様にして大川氏は財閥に頼らないで自分で独力大事業を作り上げられた。其卓見なり努力なり財力なり、今で申します本

当の実力者であつたことは実に見上げたものでありまして、到底常人の出来ないところであります。

更に大川氏が富士製紙の社長をも兼ねるようになりましたが、このいきさつについては御承知の方もありましようが中には大川氏が富士製紙を奪つたと云うような誤解を持つて居る方もあるかも知れません。それは全く誤解で其の辺のいきさつを少し申上げます。富士製紙は私が王子に入った当時に原六郎氏が社長で其後に窪田四郎君が社長になりました。この方は私共と同じく元三井物産に居つた人で、内田信也君の兄さんです。原氏が社長時代に甲州出身の小野金六氏が専務この人の甥でしたが、其姻戚になる穴水要七君が入つて販売部長をやつておりました。そこへ窪田君が入つて来ました。同君は誠に明快な紳士で、まあどちらかと云えば商売人と云うよりは理想家肌の人でした。社長に就任するや何でも王子に負けてはいかんと云うので、私の方よりもう一段大きな網巾一八五インチという当時最大のマシンを江別工場に据えつけ、一方には水力発電を持たなければいかんと云うので、芝浦の岸氏に頼んで野花南といふ所に水力発電所を建設したりして積極的に發展策を講じて居りましたが、万事多少理想に捉らわれすぎたようで、これに対して穴水君は実地から叩き上げた実務家であり、又商人として有数な方でしたので、窪田君のやり口を嫌つて、大川氏に相談した結果大川

氏が富士製紙を兼ねるようになった次第であります。その当時
広瀬君が技師長であったが、同君は学校出ではありませんでし
たが立派な人でした。穴水君としては自分の方には優秀な技術
陣がないのでどうも物足りない、どうも王子に負けるようだか
らと考へ大川氏に入つて専ら技術を見て貰い、自分は営業方面
を担当すると云うことで話がついて、大川氏御兄弟が関係され
大川氏が社長で穴水君が専務でやることになったんです。そう
いう訳で大川氏が富士を強引に強奪したのも何んでもありません。
それについて面白い話があります。その窪田君がさつぱ
りと後を譲つて、製紙会社の連中や各販売店の連中を日本橋の
福井楼に招いて、引退の披露宴を催したことがありました。そ
の時の挨拶が面白い。「世の中には後進に道を譲るといふこと
があるけれども、今回は自分は先輩に道を譲るのだ」といふた
ので拍手が止まなかつた。窪田君は友人として誠に御気毒でも
あつた。そういう風なことで大川氏は富士製紙をやることにな
つたのであり、大川氏は愈々樺工と富士の経営を兼ねられて製
紙界に大成したのであります。

それからどうして三社が一緒になつたかと云うことでありま
す。これは王子としては何もそんなことを考えていませんでし
たが、穴水君の株は遺族の希望によつて、同君の遺書にもあつ
たそうで、王子が引受けることになつて王子は富士の一番の大

株主になりました。それが為めに大川氏の懇望もあり、私の方
から小笠原君を穴水君の後任として専務に送りこんだような次
第でございますが、併し何もこれは合併しようとか何んとか云
う事は無かつたのであります。穴水君と私とは商売上所謂商売
敵であるが、日常の交際は誠に懇意でした。その穴水君が代議
士になつてから間も無くでしたが、曰くには、——高島どうだ、
君は一生この仕事をやる積りだろうが、俺は年に二十万円も(そ
の当時の金で)楽に使える金があれば、仕事は君達にやつて貰
つて俺は政治をやりたいという。——それではお前一体政治を
やつてどうする積りなのかと私が云うと——俺は政治をやつて
大蔵大臣になる。今のような金融のやり方じゃ日本の産業は伸
びない。それだから仕事は君等がやる、合併しないかと——い
う話があり、私は、合併は容易に出来るものでないそれは君無
理だよ、と云うような斯ういふ話があつたのです。それから穴
水君が亡くなりそんな話は消えておりましたが、結局問題が起
つたのは次のような次第です。

穴水君は強気な人でしたから、富士製紙は紙が余れば自分で
ストックし販売店にも持たせる、結局景気は循環するのだとい
うことで、これは第一次大戦の時大当りでそれで非常に儲けた
こともありますが、その様なことで穴水君は却々強気でした。
然るに景気は容易に直らない。これが大川氏と穴水君と始終衝

突するところで、大川氏としては穴水君に営業を委しておるんだけれども、そう下手なことをやられては困る、王子は何も持っていないじゃないかと云うことで二人が時々論争をしました。ようだが、穴水君は今申した通りどうせ景気は直るものだ循環するものだという信念であったのだが一面には又樺工と製品のかち合ふ為でもあり、これを反駁して富士で造ってよく売れるような模造紙なんかを樺工でも真似をして造るからだ、これは貴方が富士の内輪のことを知っておるものだからだ。それだから紙が余るんだ、と云うようなことで、やっているうちに穴水君は亡くなる。加之第一次大戦後米国で新規に出来たオーシャノンフォールの製紙会社が新聞用紙の投売に來たので富士も樺工も全くの赤字、苦小牧は僅かに黒字と云ふ悲惨な目に遭った。所謂泣面に蜂で更に一九二九年の十二月の末、アメリカの農産物が暴落したのがキツカケで世界的不景気がやって來た。昭和六年が其どん底でした。

その間、大川さんの方では藤田君が金融を受持っていました、その金融がだんだん苦しくなつて來たので、藤田君が小笠原君の家と近いものだから、毎朝出掛けに訪ねては、おい何とかしないかと動かし居ったのが、だんだん合併案の煙が火を見るような型になつて來た訳であります。それではうちで一つ案を作ろうかと云うことになつて、私が合併案の株の比率なんかを、

資産なり生産力なり収益力なりを綜合して作りました。其基礎になつた数字は、栖原君が極めて簡略に書いた材料があつたので、それと紙業雑誌などに公表された材料などを参考とした。これらを土台として三井合名会社に合併の有利なる事を説明しましたが、貧乏人が三軒集つたところで良くはならぬ、結局三井銀行が金融を負ひ込む様になるから、それは困ると、云ふことでとうとう沙汰止みになつたのであります。藤田君は大川氏から金融の遣り方が悪いと大分叱られた様ですが、藤田君としては兎に角金融に苦しいものだから、何とか一緒になつた方がいいんだと一生懸命でした。そんなことであれこれやっているの中に、焼け棒杭にまだ火が残っていたんでしよう。それを後に三井銀行の池田成彬氏が聞いて、若し合併して君等が予定せる年七歩の配当が確實に出来るということであるならば、銀行は金を貸すのが商売なんだから、確實なものに貸さんと云うことはない。どうだ俺が一骨折つてやろふではないか、その調書を見一度俺れに見せろと云う話が藤原氏にあつた。その調書を見てこれなら心配は無いじゃないかと云うんで結局池田氏が乗り出してくれることになりました。その当時結城豊太郎氏が興業銀行の頭取で、樺工の金融は主として同行が面倒を見ておられたので池田氏は、結城氏を語らつて、このお二人が中心になつて世話をなさつて此合併をでつち上げたといつてよいのです。

併しよく考へて見れば合併は理屈はよくても平常無事の時には容易に出来るものではないが結局は連年の大不況の為弱体化されたのが其原因となり否応なしに之を遂行させたものとも云えます。大川氏としては一生紙に終始しようとしたので、誠に残念でありましたでしょうけれども、併しもともと御自身で作られた王子を大きくして又王子にお帰りになったというような訳です。大川氏が我が国製紙業の大きな見地から、三社合併に踏み切られたという経緯は、こういうような成行で御座います。

まあ話が大変長くなりましたが、もう少し側面からの大川氏のお話を申し上げます。大川氏には、私は同業者の会合以外には余りお目にかかりませんが、只だ世間の評では、大川氏は傲慢無礼な人だとか、何んでも強引にやる人だ、紛争を起したあとに柔らかな田中氏が行って柔らげて来て、二人の兄弟が好いコンビで旨くまとめてゆくとか、或いは大川氏は金に穢いんだとか云う色々世評をされて、王子を引退なさるについて色々な評を加えられたようなことがあったようです。そのようなことが私の先入観になっていましたが、実際始めて会って挨拶しても、大川氏は余り頭を下げない人でした。そんな訳で大川氏という人は噂さに聞いたように、始めは随分無礼な人のようにだと、こう思っておりました。処が本当はそうではありません。他人の云うことをろくに聞かないというような風の点も

或いはありましたでしょうが、大川氏という方は誠に豪放で且つ緻密な人で、又た一面芸術を尊ばれ頗る質素な方でありました。まあ何にたとえましょうか、大川氏という方は大きな山を見るようで、見る方面によって違う。それだから一面からちよつと見て大川氏を評してはいかんなと思つたのであります。

あの当時お慰みにやられた歌沢は全く名人の域でした。当時の実業界中素人ながら家元に次ぐ歌沢の巧者といはれたのは大川氏と味の素の鈴木三郎助氏でしたが、藤原氏があの出ない声で清元を習つて少し節が出来るようになったら、先生、人を招いて聞いて呉れというので、大分迷惑された人があつたようですが、これを小笠原君が或時、大川氏に、藤原氏が歌沢をもやっているが歌になりますか——と尋ねたそうです。そうしたら大川氏の其の時の言葉の含蓄が面白い。これは私共でしたら、あれは歌になっていないと一言で云つて了うが、大川氏はそれは仰っしゃらない。——歌というものはね、まあ十年十五年積古して自分の声が自分に判るようになって、始めて一人前になるんだよ、と申されて冷かすような素振りも少しも無つたそうです。藤原氏は無論下手に決っている、まあ下手の中に末だ入らぬ時だけでも、そうは云はない。これは中々面白いところで、心胸の広いところがあるように見られます。

それから一つは慾張りとかう申しますが之れも当りません。

今と違って明治は無論のこと大正になる迄、実力者と申しまする方々は経営手腕があるのは勿論であります但同时実力即金力、投資力が無ければいかん。金を溜めておかなければいかん。それが故に大川氏も其の点に於ては余程努力なされたものと思ひます。そういう努力をしたために、何んとか彼んとか世評を蒙る点もあつたかと思われます。併し世評は余り当てになりませぬ、こんな話があります。小笠原が向うに参りましてから一二期あとでしたか、私に云うのには、——君、お互いに大川さんを慾張りだ慾張りだという世間の評判を聞いて、或いはそんなのかなと思つておつたんだが、決算で重役賞与を分配することになつて、実は案外に思つたよと云うのです。どういふ訳だと聞いたところが、大川氏の曰くに、——富士製紙の賞与としては、どうも会社の利益の狀態からいって、そう余計に取る訳にいかんし元來総額としては少いんだから、其内で君達が余計に取つて呉れ、自分は別に困らないからと云つて、——自分のを少く専務以下を先生の何倍かにして分けて呉れたので、どうも勝手が違つたという話を聞いたことがあります。成程程大さくなる人は矢張り違ふなと思ひました。それから書生を養われて、しかも新聞等世間に発表されることを嫌らわれて、つまり陰徳を施されておつたと云うことを、この間成田君から伺つて、成程程大きな山を一面から丈け見て評してはいかんと云うこと

を、益々思つたような次第であります。つらつら思ひますると、此度大川氏生誕百年祭の主催者である桜影会会長の池田君が、大川氏の人格を心から讃えたお話があつたが、誠にその理由があることだと思ひます。

大川氏が極く質素であられたことを申し上げます。私は二度お宅に伺つたことあり、一度は末だ向島のお屋敷の時で百花園のお近くの方でしたが、その日伺つたのは藤原、私、小笠原、井上、足立でしたか。向うさんは長谷川君始め其他鈴木実君もおりましたか、四天王の面々が列席して、お宅で奥様のもてなして御馳走になつたことがありました。お屋敷は旧家の跡の古い家をお買ひになつたとかで、頑丈な作りの大きな田舎家で庭も広く、大きな池なんかもあつたようですが、その池の先ぎに田中氏の別宅がありました。ところがそれ丈けの構えでしたけれども、お座敷の床を見ますると一行ものが一ぶく掛つていて、ほかに別に飾立てるものは無かつた。私は大体金の無いくせに書画が好きなのですが、その一行ものをよく見ますと、伊藤博文公の書いたものです。あとで大川氏の説明をお聞きしますと、渋沢翁が伊藤さんを自宅に招かれて、宴会をなさつた時に席書に、伊藤さんがお書きになつたという。文句は、「毒草野にはびこる」というのであります。その当時政客がはびこつて色々議論を上下した時代であつて、それで伊藤さんが困られ

てそんな文句に云い現わされたとも思いますが、それによって世代の空気的一端が判ります。今日おられたら伊藤さんは何んと云われますか、或いは毒草以上に書かなければならんと思いますが、兎も角それを一幅掛けられておったわけで、誠に質素でありました。其の後又何かの会で待合せている間に、大川氏のお話を伺いました。その当時三井系の人は茶をやる人が多く、これは非常に金が掛るものでして、今でもかかるでしょう。大川氏が申されるのに、自分も茶は嫌いではないけれども、金の掛る無用なこととはしたくない。僕の父が文雅な事が好きで、時々日本橋の中通に行つては何に彼と持つて来るから、それを後から持たしてやつて一割引で買戻して貰つているから、僕の家には何も無いよ。ただ自慢すれば景文が一幅あるよといわれた。成る程質素な方だと思ひました。

それから田端のお屋敷に伺つたことがあります。これは富士製紙の株を王子が持つて、穴水の代りに誰れか王子から専務が欲しいという時に、大川さんから名指しで私に専務として来て呉れという話があつて、実はそれを断りに参上したのであります。と申しますのは、三社の病は販売だ、この販売をてんやわんやでやるから三社が苦しむのだ。此処に何にか調整をしなければいかん。私は王子の販売を受け持つておりましたので、それが痛切に感じておりましたから、富士と王子の販売の調整

を社長の指揮の下に私に委せるかどうかと云う条件を藤原氏に出したところ、藤原氏はそれは如何様にやつても嫌だと云う。

それでは私が行つたところで甘くやつていけないから私は富士に行くのはいやだと言つたような次第です。まあそんなこんなで結局藤原氏は、——それじゃ君、大川さんが君を名指して来たのだから、君が自分で行つてお断りして来いと云うので、私がお伺ひしたのだが、丁度大川さんの御病気の初期の頃でしたか、その時にお目に掛つたのであります。お宅は矢張り大きな家でしたけれども、誠に御質素なものであります。私はつくづく考えますのに、支那の言葉で日本に伝つて来て、日本人も普通使つている言葉に「吝嗇」という言葉がありますが、「吝嗇」という言葉は現今はひつくるめて、けちん坊だということになつております。併しこれは支那人の解釈を見ますというと「吝」はけちん坊で出す可きものも出さない、取るものだけは取ると云うのが「吝」で、「嗇」は無用を節して有用な場合は適當に出すという意味であつて、「吝嗇」と二つ並べていますけれども意味は全く違つてあります。これを老子が解釈して、「儉にして慈、敢て天下の先とならず」と云つております。先とならずといふのは、人を押しのけて行こうということが無くてお互いに譲り合つて行く、お互いに人格を尊重し合い、お互いに権利を尊重し合うということで行くから天下が治る、こういうことを

老子が云つて居りますが、大川氏は正に儉にして慈を實行なされたお方であります。今更乍ら私はその人格の大きかったことを尊敬して止まない次第であります。

話が長くなつて相済みませんが、もう一つ付け加えさせて戴きたいのは、田中栄八郎氏のことです。大川氏の御長兄の英太郎氏には関西で仕事をなされておられ、紡績業の方でありましたので、とうとうお目に掛る機会も御座いませんでしたが、田中氏には始終お目にかかつておりました。先き程申上げたように、大川が強引に行けば田中が柔らか手で行くんだという云う様な噂が出るように、田中氏は誠に人さわりの良い方でありました。そのような方でありましたから、其伝記を作る時に、花柳界その他も入れて賑やかな伝記にしたらどうかと、そういう方針で作らしているとか、私はほのかに聞いておりましたが、後で私はその伝記を見て、私の思ったことが書いて無いので大変失望しました。田中氏は柔らかな面もありましたけれども夫れは一面で、却々緻密な計画をもつて信念の強い方でありました。田中氏は大川氏と王子に入られ、王子の工場に勤めておられる時に、先き程申上げたように大川氏は技術の方をやられたが、田中氏は事務の方で主に材料の買入れ等をおやりになつておつた。田中氏の日頃のお話を総合して考えると、日本の行く道は自分で出来るものは自分で作らなければならん、というお考えであ

つたと思います。今日お見えになつておられる石川君の御尊父と田中氏が協力して、関東酸曹会社を経営されていきました。先代の小西喜兵衛さんなんかも協力してやつたんだと思いますが、此会社は苛性ソーダその他製紙に必要なものを作り、同時に肥料も作つておりました。今は化学工業というものが非常に興つておりますけれども、当時から申しますと、化学工業を専門にやつておつたところは関東、関西を通じて誠に少なかったのであります。

田中氏はこういう風な所にも眼をつけておやりになり、それから又た一つ新しいものを残して下さつたのは今のフェルト会社です。これは日本では何十年という間、外国の品物を使つておつたのでありますが、これに眼をつけて、もうこれだけ日本は発展して来たのだから、自分で作るのが本当ではないかと云うので、フェルト会社を目論まれた。これは大川氏は関係なさらんで田中氏独自の発意丈けであつたように思われますが、それで私の方にも勧誘があり三菱にも勧誘がありました。私の方は最後の株の締切りの日迄返事をしなかつたのは、どうせこつちでやつても超速力の機械には間に合わんだろうということ躊躇しておつたのです。ところが三菱が先きに判を押し富士も判を押し、君の方丈けがどうだ、もうぐずぐず云わずに判を押せということで、藤原氏と私が田中氏の電話を聞いて、し

ようが無いじゃないか、それでは仰せの通りにいたしませうと云うことで参加いたしましたと一緒にやりましたのが今日のフェルト会社であります。これも全く田中氏の余徳みたいなものでしょう。それ迄は日本にはイギリスのフェルトとアメリカのフェルトが入っていました。アメリカはハイクという会社が入れていましたが、アメリカにも却々立派な人がおりました、この会社の社長の老人が、——もう何年も日本で儲けさせて貰っているから、これから日本自身も自分で作った方がよからう、秘伝を教えるから技師をよこせと云うので、その交渉に行ったのが後継者田中寿一君で、寿一君はそういう際の交渉には手腕を有しよくやってくれました。その為高橋君がアメリカへ行つて向うの技術を覚えて帰つて来ましたのです。当時の百四十二吋用も楽に作れるようになりました。

その外に田中氏は、未だ日本ではガラスの製造が發展していない時に、ビール会社の壺なんか作るガラス工場も作つておつたのであります。そういう風で田中氏は只柔らかな人であつたとばかり思っている方が、旧い方にはあつた様ですが、そういう様に常に新しい工業に眼を付けられておつた人でありました。こういうことはどうも余り御承知でない方もあるようですので、今日大川氏を偲ぶと同時に、大川氏と形影相伴つて事業をなさつた田中氏の一面を、これもほんの一面かも知れませんが

が申上げました。

順序もなく大変長いお話をして相済みませんでしたが、御清聴を煩わしまして誠に恐れ入ります。つけ加えますがもう私も少々老碌しておりますから、記憶の間違ったような点もあり、又お話の中に或いは怪しからんことを云つたと云うことがありましたら、どうぞ御遠慮なくお直しを願ひ度いと思ひます。

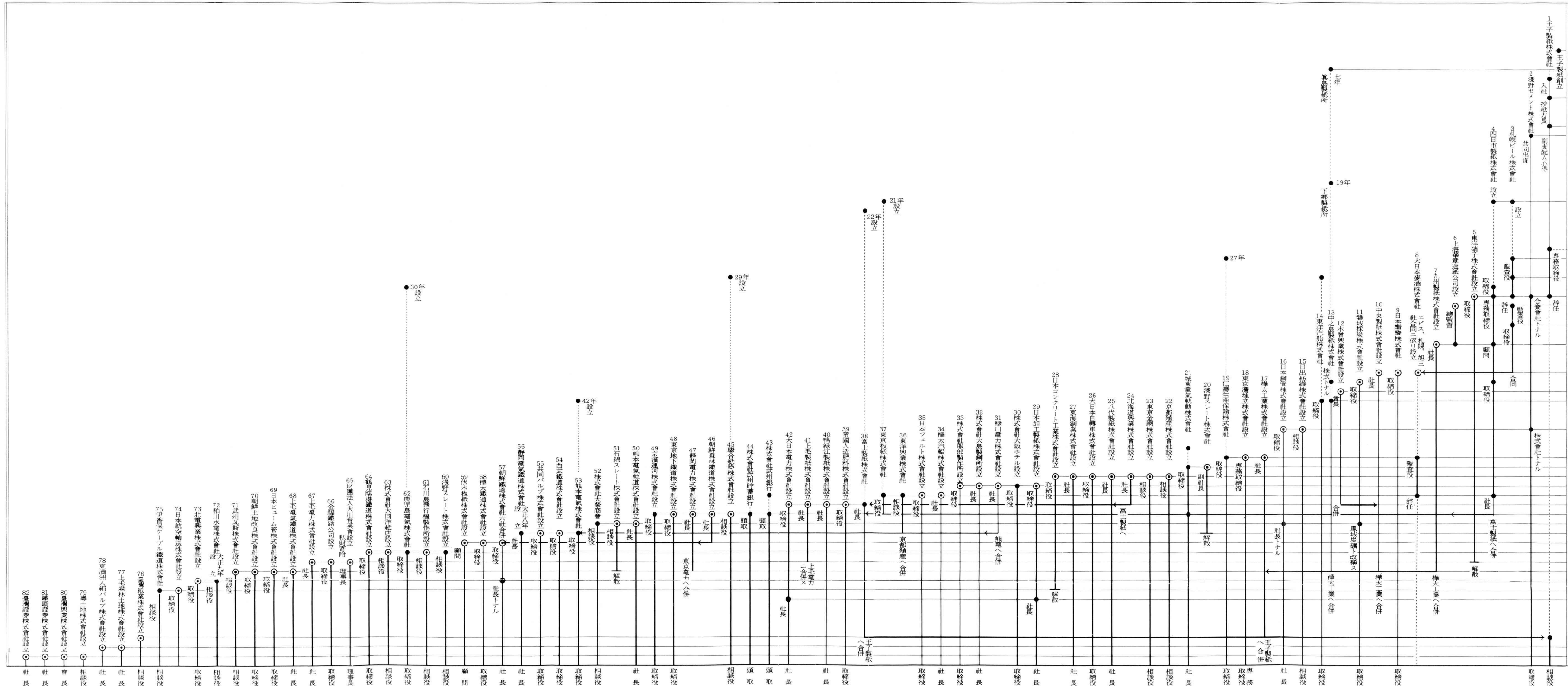
大川平三郎先生年譜並びに関連事項

年号	年齢	西暦	事	事項
万延元年		一八六〇	一〇 川越藩三芳野村(現坂戸市横沼)に生まる	二二 二〇
明治四年	五	一八七二	一一 創立願書を大蔵省紙幣寮へ提出発起人 一二 祖父平兵衛死去、享年七〇歳	二六 三〇
	六	一八七三	二 紙幣寮より会社設立の認可を受く。社名を「抄紙会社」と称す	二九 三七
	七	一八七四	七 支配人に谷敬三就任	三一 一八九八
	八	一八七五	九 工場建設地府下王子村に選定鹿島岩蔵の請負にて建築に着手 三 大川平三郎製図工となり次いで職工となる。	三一 三九
	一〇	一八七七	抄紙方長となる	八 八
	一一	一八七九	製紙業研究のため米国へ出張	八 兼技術長となる
	一二	一八八〇	一〇 帰朝副支配人に就任	八 王子工場従業員過半数同盟罷業抄造一時停止
	一三	一八八〇	五 欧米製紙業視察のため渡欧	二 取締役兼技術長を辞任王子を去る
	一七	一八八四	九 帰国	二 四日市製紙工場完成専務就任 中部工場完成
	一八	一八八五	四 木曾及び大阪地方の山林視察	二 大川設計監督による上海の華章造紙公司開業
	二〇	一八八七	九 パルプ製造研究のため米国へ出張 一一 富士製紙(株)創立資本二五万円、社長河瀬秀治	六 上海より帰国東肥製紙の経営を委託さる。独立して事業経営の糸口となる 三 母光子死去、享年七一歳 東洋汽船副社長として渡米

大正二年	四三	五一	一九二〇	七	渡米、一〇月帰国	一四	六六	一九二五	寄付
	五四	一九二三	二	父修三死去享年八五歳					二 大川育英会を創設
	五六	一九一五	二	樺太工業(株)創立資本金二百万円。社長					七 富士落合工場クラフトバルブ製造開始
	五七	一九一六	八	樺工泊居工場開業					八 富士大日本製紙買収(後中川工場)
	五九	一九一八		三芳野村青年団顧問					一一 樺工恵須取工場開業
	六〇	一九一九		横沼に消防ポンプ寄付					四 樺工中央製紙九州製紙中之島製三社を合併
八	六一	一九二〇	四	賜紺綬褒章	一五	六七	一九二六		一 富士知取工場開業
九	六二	一九二一	六	樺工樺太炭砒会社を合併	昭和二年	六八	一九二七		一 富士本社震災焼失跡の新築ビルへ移転
一〇	六三	一九二二	二	富士真岡工場開業					三 富士中川工場休止
一一	六四	一九二三	二	富士東京板紙及び四日市製紙を合併					二 照子夫人逝去享年五五歳
	六五	一九二四	四	富士大阪工場廃止					七 樺工中之島工場廃止
			五	樺工真岡工場全焼					七 樺工木曾工場閉鎖
			二	大川田中事務所開設樺工九州製紙中央製東京出張所移転					一一 貴族院議員に勅選。三芳野村小学校増新築工事及び校庭拡張等のため総工費の二分の一を寄付
			六	富士日本化学紙料会社合併(後の落合工場)					一二 貴族院議員として金解禁反対論を建白する勲三等に叙せられ瑞寶章を賜はる
			八	富士神崎工場アト紙製造開始	四	七〇	一九二九		貴族院議員として金解禁反対論を建白する
			一一	賜緑綬褒章					六 富士金山工場廃止
			一二	富士江戸川工場開業	五	七一	一九三〇		七 富士池田工場廃止
				樺工資本金を千八百万円に増額決定					一〇 樺工泊居工場人絹バルブの試験製造
				三芳野村信用購買販売組合(現農協の前身)理事長	八	七四	一九三三		五 王子富士樺工三社合併
一一	六四	一九二三	五	大平炭砒採炭開始					大病にかかる
一二	六五	一九二四	六	大震災善後会委員	九	七五	一九三四		旭日中綬章下賜
				富士梅津製紙及び熊野製紙を買収	一一	七七	一九三六		一二月三〇日死去享年七七歳
				貧乏追放のため三芳野村村民にむしろ織りの副業を奨励し資金として三百円					記載事項は王子製紙社史、大川平三郎君伝、坂戸市郷土資料によるものです。事項欄の数字は月で、記載のないものは調査未了のものです。

大川平三郎事業關係年譜

萬延元年10月出生



明治 4年 十二歳祖父平兵衛翁歿ス
 同 5年 十三歳洪澤家ニ書生トナル
 同 8年 十六歳王子製紙會社園引工トナリ、次子職工トナル
 同 10年 十八歳抄紙方長トナル
 同 12年 二十歳七月米國へ留學
 同 13年 歸朝、糊劑及抄紙法ヲ改良ス
 同 14年 副支配人心得命セラル
 同 15年 吸氣器發明ニ依リ一百圓賞金ヲ受ク
 同 17年 廿五歳歐米製紙術研究ノ爲渡歐ス、翌年九月歸朝、木材パルプ術ヲ傳フ
 同 20年 廿八歳、山林視察工場選定ノ爲メ遠州山奥ニ出張 (二回)
 同 21年
 同 22年
 同 23年
 同 24年
 同 25年
 同 26年 三十四歳王子製紙專務取締役トナル
 同 27年 三十五歳
 同 28年 三十七歳中部工場建設機械購入ノタメ渡米ス
 同 29年 三十九歳王子製紙ヲ去ル
 同 30年
 同 31年 四十一歳上海ニ渡ル
 同 32年
 同 33年
 同 34年
 同 35年
 同 36年 四十四歳始メテ獨立シテ事業ヲ經營ス
 同 37年 四十五歳賞買光子刀自盡去
 同 38年
 同 39年
 同 40年
 同 41年
 同 42年
 同 43年 五十歳東洋汽船副社長トシテ渡米ス
 同 44年
 同 45年
 同 46年
 同 47年
 同 48年
 同 49年
 同 50年
 同 51年
 同 52年
 同 53年
 同 54年
 同 55年
 同 56年
 同 57年
 同 58年
 同 59年
 同 60年
 同 61年
 同 62年
 同 63年
 同 64年
 同 65年
 同 66年
 同 67年
 同 68年
 同 69年
 同 70年
 同 71年
 同 72年
 同 73年
 同 74年
 同 75年
 同 76年
 同 77年
 同 78年
 同 79年
 同 80年
 同 81年
 同 82年
 同 83年
 同 84年
 同 85年
 同 86年
 同 87年
 同 88年
 同 89年
 同 90年
 同 91年
 同 92年
 同 93年
 同 94年
 同 95年
 同 96年
 同 97年
 同 98年
 同 99年
 同 100年
 現在關係

凡例
 1. 一 點線ハ會社設立後其事業關係ヲ示ス
 2. 一 印ハ事業ヲ設立シタル又ハ參與シタルコトヲ示ス
 3. 一 矢印ハ合併ヲ示ス
 4. 一 縦線ハ重役ハ重役級關係ヲ示ス

発行所 桜影会
〒108 東京都港区海岸 3-5-10
東京倉庫運輸(株)内
電話 03-453-8261

発行人 桜影会会長 池田新一

印刷所 (株)文明堂印刷所
〒114 東京都北区中十条 2-14-12
昭和61年9月 1,000部印刷